

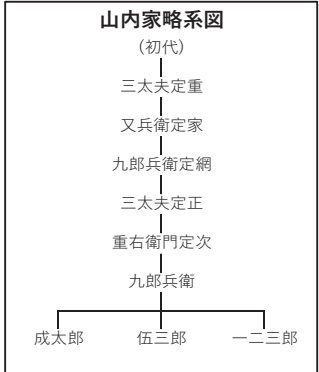


補遺

先日(二月三日付け)の京都新聞「丹波偉人伝心」欄に京丹波町保井谷出身の山内成太郎(二八六二―一九三三)がとり上げられました。山内については以前、連載第15回(※で紹介しましたが、この機会にもう少し補足しておきたいと思えます。

保井谷の山内家

まず、成太郎が生まれた保井谷の山内家の歴史です。成太郎の祖父重右衛門が『耳孫教訓』という文書を書き残しており、岡光夫『幕藩体制下の小農経済』(法政大学出版局一九七〇)に紹介されています。それによると山内家初代は、



天正年間(一五七三―一五九二)初期に豊臣秀吉に敗れて落人となり、西国から「主従三人(かち)はだし」で「四、五両の金子を携えて」保井谷に来住し、百姓になったといわれています。二代目の三太夫定重は、保井谷で生まれ、三代又兵衛定家は、沢瀉(さわが)ほうづき、蘭などの作物をこの地に導入し、「鎌(か)を使う事」も広めました。その子九郎兵衛定綱は、よく弓を引き、生け花を好む人でした。定綱の子三太夫定正の代には繁栄と没落を経験しました。定正は「屋敷を大いに普請し」、近在に「七百石余り買取」るなど繁栄をきわめ、その名は「国中に隠れなく、福有と器量(もく)を以(も)つて」響きました。それまでの「路谷(は)を「保井谷」に改めたともいいます。そして、この時代に旗本島弥左衛門の代官に任じられました。島氏は、現

京丹波町域で保井谷、栗野、妙楽寺、三ノ宮(二部)、実勢の村々を所領としていました。しかし、定正は「さしたる罪も無かったのに讒言(ざんげん)によって」追放(おしな)にあい、再度(また)帰(かへ)り給(たま)はず、「当家滅亡の時節」に至ります。この定正の子が『耳孫教訓』を書き残した重右衛門定次です。他の兄弟五人が父と同罪として追放されたので、末子でただ一人異母弟だった重右衛門が名跡を継ぎました。重右衛門は、親が危機に陥ったのは商品作物や商売に心を奪われたためだと考え、子孫には稲作に専心するようにと『耳孫教訓』を書き残しました。その子が成太郎の父となる九郎兵衛で、万延元年(一八六〇)に一揆勢の襲撃を受けたときの当主です。明治五年(一八七二)時点で保井谷は戸数二九戸、人口一四八



重要文化財「旧三上家住宅」(宮津市河原)

した。宮津の三上家は、江戸時代に酒造業・廻船業・糸問屋などを営み、宮津藩の御用金を扱った豪商でした。その住まいは現在「旧三上家住宅」として国の重要文化財に指定されており、往時の繁栄ぶりがうかがえます。

から以下、引用します(『春日抄』中央公論美術出版一八八二所収)。「記憶に残る伯父は長身瘦(うす)く、松籟(しょうさい)をひびかせた孤松(こしょう)のような感じであった。若い時は端麗(はなは)であったと思われる白皙(はくせき)の顔には、風雪に耐え抜いた枯淡(こたん)な笑みがたたよ、赤みをおびた頬と白髪(しろかみ)とが、さりげなく美しい対照をみせていた。洋服がよく似合った」「父や、父の生家を訪れた兄の話によると、屋敷の構えはひどく大きかつたようである。後年、その母屋の一部が園部に移されて公会堂として使われたそうである」「当時の伯父は、すでに第一線を退っていたのではないかと思われる。そうして旭川組合教会の長老として(略)熱心なその

支持者であり、教会での活動はもとより、教会関係の社会事業には常に関係した」「もともと熱意をこめて打ち込んでいたのは禁酒会の仕事であった。(略)声を大にして禁酒運動を続ける伯父やその家族に対して、しばしば嫌がらせや脅迫もあつた」「伯父の死を知ったわたくしが強いショックをうけたことは、受洗記念に伯父から与えられた聖書に『山内の伯父様、大正十二年十一月五日、相州茅ヶ崎にて歿せられる』と沈痛な字で書きとどめていることによつてわかる。中学五年のときであった。その聖書を、伯父はわたくしに与えるとき、その扉に『谷川に腹洗う蛙かな』という句を記された。あまり上手ではないが、野武士的でユーモラスな暖かさがこもっている。成太郎伯父はそのような人であつた」

山内家 丹波屋と佐野文字

佐野文字は、旭川で廃娼運動や刑余者の更生保護などに取り組んだほか、戦争中に東条英機の家庭秘書だったことでも知られる人物ですが、丹波屋商會第二代社長佐野啓次郎夫人でもありました。佐野啓次郎の妹が成太郎の次男英二のちの第三代社長の妻という関係でした。啓次郎は大正六年(一九一七)、成太郎に請われて第二代社長となりました。文字は島根県出身。幼時より利発で、年齢を繰り上げて四歳で小学校に入ったほどでした。明治四二年(一九〇九)、旭川の医者に嫁いでいた姉のもとへ転居し、小学校教員をへて啓次郎と結婚。しかし啓次郎は大正十年(一九二二)に早逝します。文字は夫亡き後、廃娼運動に挺身します。遊郭主から刺客を送られたりしながら、命がけで



佐野文字(1893~1978)

娼妓たちを支援しました。戦争中、文字の活動は国防婦人会へ移ります。その活躍と人柄が中央にまで聞こえ、総理大臣東条英機家の私設秘書に任命されました。東条家では約三年間、書類整理、子供の世話や教育、夫人の相談相手などをつとめ、東条からも「佐野先生」と呼ばれていました。戦争協力に傾いた文字でしたが、東条が戦犯として処刑された後も罰を受けることなく、旭川へ戻つて戦後も多数の公職・団体の理事や会長を歴任しました。昭和五三年(一九七八)、歿葬儀は旭川市社会福祉協議会葬として執り行われました。(山下幾雄)

三上次男は小学五年まで宮津で過ごしました(一年上級に後の衆議院議長前尾繁三郎がいた)。その後、伯父成太郎の誘いを受けて一家で北海道へ渡り、旭川中学、浦和高校(埼玉県)をへて東京大学へ入学、考古学を専攻して東大や青山学院大の教授をつとめ、東洋史研究に大きな足跡を残しました。(兄の一人は丹波屋へ入社しています)



三上次男(1907~1987)

その三上次男の「山内成太郎伯父とわたくし」という随筆

三上次男(1907~1987)

三上次男(1907~1987)